

自己肯定感と基礎学力の向上を目指した取組

天理市立北中学校

本校は校区内3校の小学校から進学の子供を迎えるが、過去の「荒れ」の影響を引きずり、低い進学率に留まっている。

こうした背景の中、学習に課題をもつ生徒の比率が比較的高く、全国学力・学習状況調査の結果などにも、基礎的基本的な学力の不足がみられる。これは、「分かったという体験」の不足、自発的学習や新たな学習内容に取り組む上での抵抗感となっている。さらに、問題解決、課題克服に対しても自信がもてず、日常の様々な場面でも自己肯定感の弱さを示す言動も多い。生徒が能動的に学習活動に参加する意欲をいかに喚起するかが課題である。

(1) 学力調査活用アクションプランを活用した取組の実際

① 言葉の力を意識した取組

- ・ 聞くことを徹底させる指導

「生徒の話聞く」「聞かせる話」をすることで静かにさせ、話を聞く態度へと導く。

「教員の話聞けば、いいことがある」と実例（先輩の体験談等）を話すことで集中させる。

- ・ 的確な指示（言葉）とやり切るまで待つ教員の姿勢（「丁寧さ」「しつこさ」）

- ・ 言葉遣いや礼儀作法、マナーの指導

示範指導を通して体に染み込ませる。丁寧語や生徒を納得させる言葉での指導

- ・ 当たり前なことでも「形に表す」指導

「授業規律」「約束事」→教室掲示（説明・復唱・振り返り）。教員の自戒も含めて。

- ・ 9年前から「朝の読書」タイム（毎朝20分間）の実施

→静寂さと落ち着きの中で学びの環境づくり→エスケープと暴力行為が皆無となる。



朝の読書風景



授業規律の教室掲示



校内研修(学力づくり)

② 全校体制の「学力づくり」

- ・ 中学校は教科担任制のため各教科の指導は教科に任されており、学級担任は生徒の生活背景を知っていても、個々の教科における学力の実態はつかみにくい傾向にあ

る。また、学級担任が生徒の実態に応じて独自の学力づくりを進めることは、「なぜこのクラスだけ特別のことをするのか」など、不満を生む一方で、成果が見えにくく、生徒も教員も半ば諦めてしまう傾向もある。これらを払拭するためには、中学校においても教育課程の中に「学力づくり」を明確に位置付け、全校体制で取り組むことが成果を生み出すと考える。

- ・本校における学力づくりはそれぞれの教科指導の根幹となる基礎的・基本的事項を確実に定着させる「基礎学力づくり」と小学校中学年以降からの発達課題となる抽象的思考（科学的思考）へと移行させるための「概念づくり」が本校生徒の課題と思われることから、これを同時に行うことが必要である。「基礎学力づくり」は、教科指導のみならず「朝の読書」や「学力向上タイム」など、学校・学年体制で取り組み、「概念づくり」は、各教科の基礎と基本を意識した意図的な語彙指導等の取組により、生徒の思考形態を具体的思考から抽象的思考（科学的思考）へと発展させることが期待される。
- ・本校における学力づくりのための教育課程編成上のポイントは次の三つである。一つ目は、生徒の実態把握のために「基礎学力確認テスト」（国語・数学・社会）を定期的実施して生徒の実態を把握することである。このことにより担任がクラス生徒の実態（学力と生活）を把握でき、小学校時の学習実態も分かる。また結果は指導資料（教科指導）として生かす。二つ目は、生徒の発達段階を十分踏まえ、3年間の見通しをもった体系的・具体的な目標を設定することである。三つ目は、人格形成のためのキャリア教育（第1学年職業インタビュー・第2学年職場体験学習・第3学年進路講演会、高校出前授業）を通して生徒の自己肯定感を高め、学ぶことの意味をつかませることである。

③学力向上タイムの実施

- ・学習意欲の喚起には、学習方法の具体的提示と成果が目に見えることが必須である。
- ・学力向上タイムは毎週1時間（月曜1限目）に全学年で実施する。学習理解のポイントとなる課題の解消と支援、発展的学習を行う。学年担当教員全員でクラス指導する。
- ・小学校の漢字力と計算力→生徒の自尊心の尊重と学習意欲の喚起
→小学校の学習漢字を熟語の形で語彙として習熟させる。
→入試に出た計算問題（公立高校の過去問題）の活用
- ・中学校1週間の授業内容の復習とポイント確認（授業とのリンク）
→基礎基本の「学力づくり」を教科の授業に振り分けながら、中学校の学習内容にも意欲的に取り組ませることが大切である。
- ・入試に直結した問題演習→能力の高い生徒にも対応できる（自学自習への発展を期待）
→高校入試に出題される基礎基本の問題（過去問）を集めて演習させる。
- ・定期テストへの出題
→目に見える形で生徒に努力の結果を示すには、定期テストへの反映が一番効果的である。これだけ頑張ればこれくらいは得点できるという目安を生徒が実感できることが学習意欲の喚起につながる。
- ・その他（生徒との根気比べ、でも楽しい雰囲気づくりを忘れない！）
→姿勢指導（机、椅子へのかけ方、姿勢）から授業づくり
→鉛筆の持ち方指導（正しく持てないと疲れる、長時間の学習に耐えられない）
- ・学年ごとの取組
2009年度・第1学年…小学校の学習内容「漢字」と「計算」の復習

- ・第2学年…前週の5教科（国社数英理）の学習内容の確認プリント
※確認プリントから定期考査への出題→意欲の喚起
- ・第3学年…生徒の実態に応じた教科時数の増加(学期ごとの弾力的運用)
- 2010年度・第1学年…小学校の学習内容「漢字」と「計算」の復習
…社会の都道府県名、国名、地理的知識
…定期テスト対策プリント
- ・第2学年…市販プリントの利用（小学校の「漢字」「計算」の復習）
…5教科（国社数英理）の単元の復習
- ・第3学年…生徒の実態に応じた教科時数の増加(学期ごとの弾力的運用)
…前週の5教科（国社数英理）の学習内容の確認プリント

④「心が動く」授業づくり → 心が動いてこそ行動できる、学ぶことができる、身に付く

- ・授業規律の確立
 - 「学校生活における約束事」と「授業ルール」の掲示→教員の意識の変化
 - 予鈴チャイム（授業開始1分前）→生徒の動き、教員の動きの変化
- ・整理（ファイリング）の習慣付け
 - 資料を整理することの達成感（学びの証）→安心感
 - 丁寧な指導（プリントの貼り方、プリント回収の仕方、ノートの書き方）
- ・言葉の意味を指導（語彙指導）し、概念化を図る授業
 - 「概念」を学ぶのは思春期以降（小学校高学年から）の課題で、「概念」が意識化できないと「丸暗記」に陥る（暗記は量的に不可能になってくる）
- ・成功体験の積み上げ…発達の最近接領域（ヴィゴツキー）に即した課題の工夫
 - できることをさせる→できると実感させる→ちょっと頑張っただけならほめる（自信をもつ）→成功体験の積み上げ（自己肯定感）→それを教員間で共有する
- ・基礎と基本を意識した授業構成
 - 基礎と基本を区別すると教える内容が明確になる→評価基準も明確になる
 - 生徒の心を耕し追究に耐えられる教材の発掘、教材を生かす指導過程
 - 個に応じた分かりやすい発問・指示（スモールステップ）
 - 専門教科担当教員としての絶対的な専門性
 - 少人数制授業のメリット（生徒との対話）を生かす
 - 教員が生徒の反応（やる気）に触発される→工夫・発展→職員室の話題の中心
- ・全教員による研究授業
 - できるだけ指導主事を招へいし、教科を越えて研究協議に参加する。
 - できるところから取り組み、教科を越えて意見が言い合える雰囲気をつくる。
 - 教科相互の内容の関わりに気付き、他教科の授業づくりを学ぶ。
 - 授業によって違った面を見せる生徒の実態をつかむ。
 - 2010年度は「授業力を高める指導の研究」と「生徒の実態を把握し適切な支援の在り方を考える（観察法）」（特別支援委員会との連携）の2本柱をテーマに研究授業に取り組んだ。



研究授業(少人数第3学年数学)



研究授業(第1学年理科)



職員研修(生徒観察)

⑤生徒の自己肯定感とモチベーションを高める機会の設定

- ・ 人格形成のためのキャリア教育
→ 3年間を見通したキャリア教育(職業インタビュー・職場体験学習・進路講演会・高校出前授業)を通して生徒の自己肯定感を高め学ぶことの意味をつかませる。
- ・ 第1学年「職業インタビュー」(仕事調べ+職業講演会+職業インタビュー)
- ・ 第2学年「1週間の職場体験学習」今年度で13年目→ 職場との生徒の実態課題交流
- ・ 第3学年1学期7月「進路講演会」(講師:ハローワークジョブサポーター・高校教員)
【この間、生徒は高校体験入学・オープンキャンパスに参加する】
2学期10月「高校説明会」(高校教員による出張高校説明会)
11月「高校教員による出前授業」(生徒アンケートにより高校・学科を決定し、第1希望に参加することで意欲が高まる)
12月「先輩による進路講演会」本校卒業生(高校第3学年)
- ・ 総合的な学習の時間(全学年で実施)でも「ようこそ先輩」(講師は本校卒業生及び関係者の社会人・大学生)を実施している。



進路講演会(高校教員)



高校説明会



高校出前授業

(2) 成果について

①指標1「指導方法の工夫改善」について

- ・ 生徒に届く言葉の力を意識した指導
個々に応じた明確な言葉での指導や示範による継続的な指導により「分かりやすい授業づくり」の基盤ができた。
- ・ 授業規律の確立と整理能力の育成
声のみに留めず文字に示すことで、生徒のすべきことが明確になった。教員にとっても曖昧な点が解消され明確に指導できるようになった。また、テストやプリント類の保管指導をすることで、生徒の授業への取り掛かりが早くなり、予習復習の教材として活用しやすくなった。
- ・ 概念化を図る語彙指導
小学校漢字の習得は、中学校教科書の読解と理解に直接反映するという共通理解し、各教科の根幹となる語彙の指導を重点的に行った。概念を表す言葉の意味

を重層的に理解させることで、文章の読解力や多面的に物事を考える力が少しずつ向上してきた。

・全教職員による研究授業

指導主事による指導を受け、教員が自分の授業を客観的に振り返ることができた。また高校担当の指導主事による指導を受けることで、小・中学校から高校へのつながりがよく分かった。生徒の実態を把握し適切な支援の在り方を考える（生徒観察）の研修を1学期に実施したことにより、教科を越えた授業の捉え方を教員間で共有することができた。指導方法の工夫改善には、教員の努力だけでなく、それを受け止める生徒の参加体制が重要なことが具体的事例の検討によって明らかになった。

②指標2「学習意欲の向上」について

・成功体験の積み上げを図る課題設定

学習意欲を喚起し、それを自信と自己肯定感の向上につなげるために、学習方法の提示とその成果が見えるようにすることを中心に授業を構築した。特に重点化したのは教科の勉強方法をまとめた「北中版勉強ガイド」の作成と学力向上タイムである。これにより生徒の成功体験の積み上げが可能となり、授業に臨む姿勢や態度も集中度が増し、学習意欲の向上につながった。学力向上タイムは、それぞれの学年の実態に応じて教材を選定しているが、いずれもスモールステップを大切にポイントの整理と解法を具体的に示し、段階的に生徒の力を伸ばせるような問題を準備している。

・ビジョンを拓くキャリア教育

生徒の学習意欲を高めるには「学ぶ目的」をもたせることが重要である。生徒の発達段階を考慮した人格形成のためのキャリア教育（【第1学年】職業インタビュー、【第2学年】職場体験学習、【第3学年】三つの進路講演会・高校説明会・高校出前授業）を通して、中学卒業後の「生き方」「未来」を提示し、将来の姿を描かせることにより生徒の自己肯定感を高め、学ぶことの意味をつかませている。これらにより「高校での学び」に対するイメージが鮮明になり、進路についての目標ができた生徒も多い。

（3）課題について

○一人一人の児童生徒の発達の実態を見据えた情報の共有（校区内校園との連携）

中学校単独の学力向上の取組には限界がある。中学校区の中で生徒は生活し成長していくという視点を持ち、生徒一人一人の背景や発達の実態を把握しながら、その課題解決に向けた支援をしていくことが学力向上への礎となる。そのためには校区内校園とこの視点を共有した共通理解と情報（事実）の共有（データの蓄積）が不可欠である。保幼小中そして高校へと成長していく子どもたちの発達における問題点や気付きを共有、継承していくことが求められる。連携の難しさを克服する手がかりとして、実社会で生きる学力の育成を目指した「学びの連続性」（眼前の子どもたちの将来像に思いを馳せること）を認識することを基盤にした教職員の信頼関係づくりを進めていきたい。